次世代が夢と希望を抱ける地域を目指して

名　称：かつらお胡蝶蘭合同会社　　（代表社員　松本（まつもと）　政美（まさみ））

所在地：双葉郡葛尾村

【避難指示解除状況】
平成 28 年 6 月 12 日　避難指示解除準備区域及び居住制限区域が解除

【プロフィール】
新たにコチョウラン栽培に取り組むため、村内有志 3 名と都内企業が合同会社を設立。高品質の商品を首都圏市場を中心に出荷。

【設立の経緯】
震災前、村内で建設業に携わっていた松本政美さん、田村市内で会社勤務だった杉下博澄さん、村内で兼業農家だった大友周治さんの 3 名と、村内出身者が代表を務める（株）メディオテック（東京都）がコチョウラン栽培を目指し、平成 29 年 1 月、「かつらお胡蝶蘭合同会社」を設立。今回は、杉下さんに設立からこれまでの取り組み内容についてお聞きしました。

平成 27 年、（株）メディオテックが村内にコチョウラン栽培研修センターを設立しようとする計画がきっかけとなり、松本さんら 3 名と共にコチョウラン栽培事業を進めることに。これに村内の営農再開に向け、新たな作物を模索していた村の想いが一致し、連携して事業化に取り組むことになりました。さらにコチョウランの生産から出荷まで各種サービスを提供しているアートグリーン（株）（東京都）が苗の仕入れ、各種資材の確保、栽培技術等を支援することになり、事業計画が具体化しました。

震災前の葛尾村は、水稲、畜産、葉タバコが盛んで、コチョウランは栽培されたことはなく、社員も栽培経験がなくゼロからのスタートでした。各地の産地を視察したり、群馬県、山梨県の優良農園で 1 週間～10 日間に渡り、栽培実習を受けて直接技術を習得しました。

作業中に集まっていただきました。
中列右から二人目が松本代表、右端が杉下さん
後列右は（株）メディオテック丸山さん、左はアートグリーン（株）伊藤さん

【取組の内容】
平成 29 年、村が福島再生加速化交付金を活用して、太陽光発電を備えた園芸用プラスチックハウス 2 棟（990

㎡×2）を建設。コチョウラン苗は大部分は台湾産で、花芽形成のための低温（15℃）処理後の3年生苗を購入しています。平成30年1月、台湾から苗の第一陣が到着し、栽培を開始。

栽培管理のポイントの一つは温度管理です。コチョウランは、東南アジアが原産ですが、室温18℃～28℃で管花弁が劣化する要因となります。日本でのコチョウラン栽培は、夏季の高温障害が課題となっている中、葛尾村は標高が高く、夏涼しい気候が栽培にプラスに作用しています。

コチョウラン栽培ハウス

ハウス内の温度調整は、天窓、遮光カーテン、保温カーテン、冷暖房対応の電気ヒートポンプ及び補助暖房機（厳冬期）で管理し、必要電力のうち、20kw を超える部分を太陽光発電及び蓄電気を活用しています。さらに湿度管理も重要で、湿度が高くなり水滴が花弁に付着するとシミとなり品質が著しく低下する恐れがあります。開花後は十分な日照を確保することで、花弁が大きく、かつ肉厚となり品質が向上します。

当初は、温度管理がやや高くなってしまい生育が早まったり、梅雨時期に湿度が高くなるなど、ハウス内の温湿度管理に苦労したそうです。

平成30年6月下旬から仙台、福島、郡山の各市場へ、7月21日には都内大田市場へ出荷を開始。復興への希望の思いを込めて、ブランド名「hope white（ホープホワイト）」と名付けました。杉下さんは、「故郷の新たな魅力を作り出すことができ、期待に胸膨らんだ一方、良い商品を継続して出荷できるか不安もあった。」と初出荷の心境を振り返ってくれました。

市場関係者からは、「一輪一輪が大きく厚みがある。花持ちも良く、非常に良い花。」と、高い評価を受けていますが、杉下さんは「仕立て形状を、より統一的に仕上げ、葛尾産コチョウランとしての特徴を確立していきたい。」と、商品価値向上に向け、一層努力していく考えです。

台湾産のコチョウラン苗

現在、市場へは週3日出荷しており、本格的な出荷が始まった平成30年7月から11月までの5か月間の累計で約14,000株を出荷。全体の6～7割が3本仕立てで、都内（大田、世田谷、北足立、葛西）、埼玉県（鴻巣、加須）及び東北（盛岡、仙台、福島、郡山）

の 10 市場に出荷。出荷割合は大田市場が最も多く（約 4 割）、都内、埼玉県内で全体の約 7 割を占め、東北の 4 市場で約 1/4 を占めています。市場以外では、少量ですが地元の葛尾村復興交流館（あぜりあ）内や合同会社内でも販売しています。

市場への搬送は、花き専用の空調車両をもつ専門業者と契約し、一定温度を維持することで搬送中の品質低下を防いでいます。

従業員は、平成 30 年 4 月に村内から 4 名を雇用。その後、雇用人数を徐々に増やし、現在は村内外から 12 名を常勤雇用しており、地域雇用の創出に大きく貢献しています。日中のハウス内は常に 22～23℃に設定され快適で、軽作業が中心のため、杉下さんは、「担い手の少ない中山間地でも、女性や高齢者が負担なく就業できる。」と、新しい農業の可能性を感じていました。

出荷に向けた仕立て作業

【関係機関の支援】

葛尾村は、農業復興のシンボルとして取り組みを支援。福島再生加速化交付金を活用し、栽培ハウスと事務棟・倉庫（村有の旧葉タバコ乾燥施設 2 棟を改修）を整備し、合同会社に無償貸与しています。

（株）メディオテック（東京都）からは、栽培技術者の派遣を受けているほか、合同会社との業務提携により、人事管理・経理業務等の会社運営に係るサポートを受けています。

アートグリーン（株）からは、定期的に生育状況、温湿度等の管理状況を確認してもらい、栽培技術や梱包技術について指導・アドバイスを受けているほか、市場動向や特需等の情報を得て、出荷量調整に役立てています。

双葉農業普及所からは、カイガラムシ、ハダニ類、軟腐病といった各種病害虫防除対策について、専門的見地からのアドバイスを受けています。

透明フィルムと化粧箱で梱包して出荷

【課　題】

この秋以降、予想以上に気温が低下したため、開花スピードが落ち、一時期、出荷量が計画を下回りました。市場関係者の信頼を得るためにも、高品質の商品を一定量、継続的に出荷することが第一の課題となっています。

第二は、出荷時の品質低下のリスク低減です。ハウスから搬送トラックに商品を積み込む際、雨に当たったり外気温が低いと品質が低下する恐れが

あるため、外気の影響を受けにくい積み込み方法を検討中です。

【目標・将来構想】

当初の目標は、栽培開始から3年後（平成33年）に4,000株/月（年間4万8千株）を生産し、年間売上目標を１億3000万円としていましたが、すでにこの10月から苗仕入れ数を4,000株/月に増やしており、平成31年3月には前倒しで生産目標を達成する見込みです。出荷先は、当分は市場中心ですが、将来、首都圏顧客への直接販売も計画しており、試験販売に取り組みながら、出荷体制・販売ノウハウを確立させる予定です。

コチョウランは、贈答用として年間を通じて安定的な需要があることから、杉下さんは、「収益性が高く魅力ある農業であることを実証していきたい。」と言い、将来、村内での栽培仲間が増えて、コチョウランが産地化することで、他の作物にも挑戦する農業者が増えることを期待しています。「新たな作物が増えることで地域に元気が出てくる。コチョウランがきっかけとなり、葛尾村の農業再生に向けて、若手農業者が夢と希望を持てるようになってくれれば。」と抱負を語ってくれました。

（平成30年12月）